

リスクコミュニケーションを成功させるには？

◆結果の解釈
 「専門家」の科学的発言のうち、市民に受容されたものは社会心理学的に確認されたリスクコミュニケーションの作法に則っている。ICRP勧告のような本来は紛争解決に資する指標の無理解に基づく解釈の恣意的な運用は、市民は集合知により見抜いてしまう」

◆専門家が社会の議論に資するためには支援が必要
 ・専門知をもとに社会に「助言」せざるを得ない専門家
 ・その「支援」と「保護」に何が出来るか？
 -リスクコミュは物心・表現手法にわたって支援が必要
 カギ：「相互作用的専門知(interactional expertise)」を持つ人々

◆参考：リスクコミュとしての（科学側からの）「落としどころ」？
 「(科学技術が社会に提示する選択肢に関して)どの扉を開き、どの扉を閉じたままにしておくかを決定する権利は、(科学者ではなく)市民に委ねられる。しかし、選択者はこれらの決定を正確なバランスに則った情報に基づいて為さなければならない」
 (Lord May, 2003) *英王立協会会長（当時）

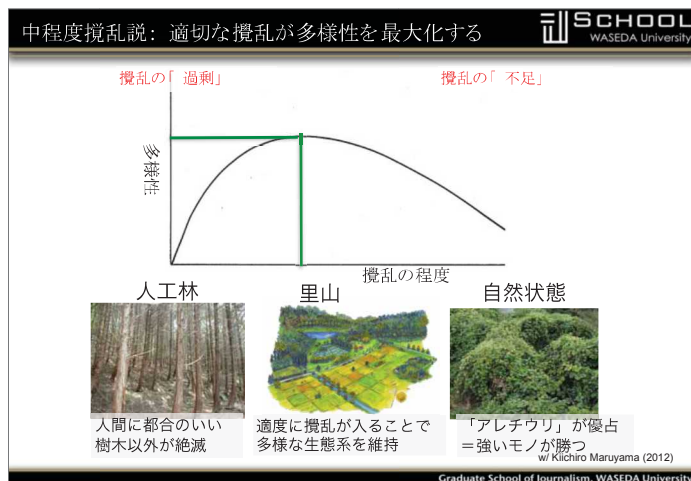
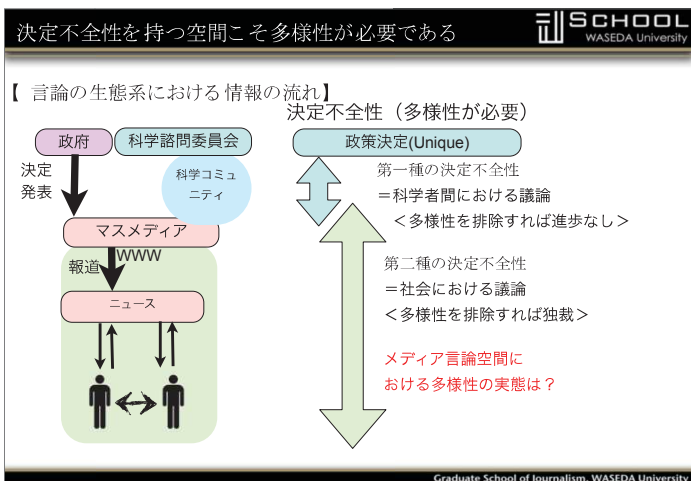
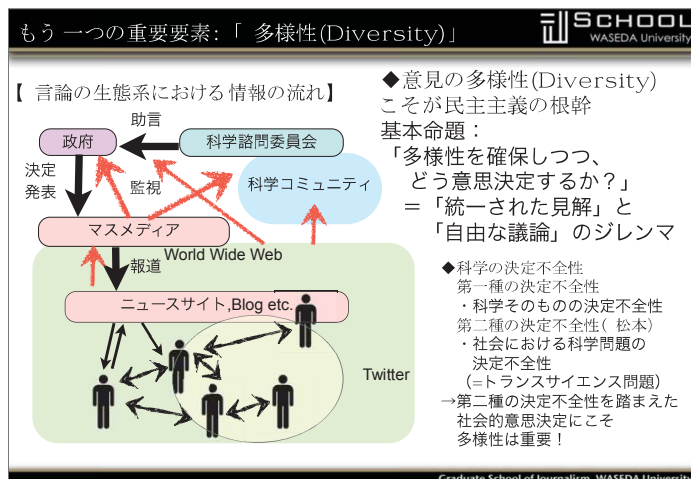
Graduate School of Journalism, WASEDA University

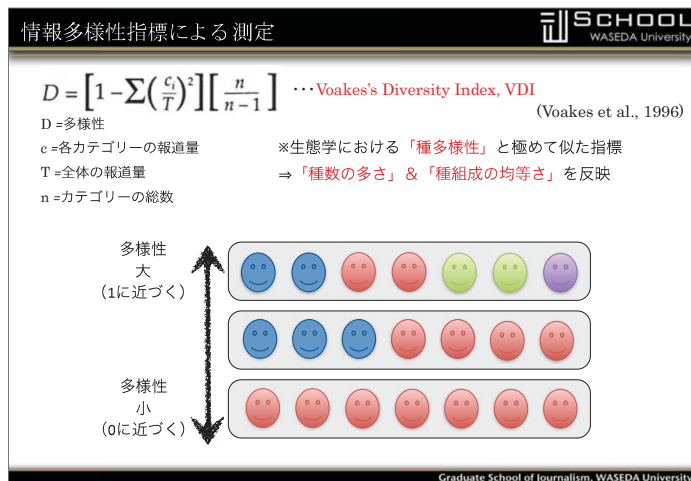
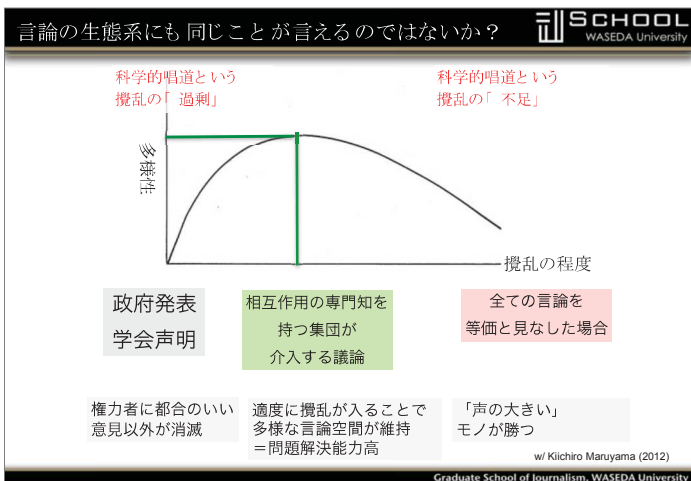
震災後の科学議論分析【2】

「『科学的意見』が統一されなかったから市民に混乱が起こった」

?

Graduate School of Journalism, WASEDA University





多様性は高く維持される必要がある

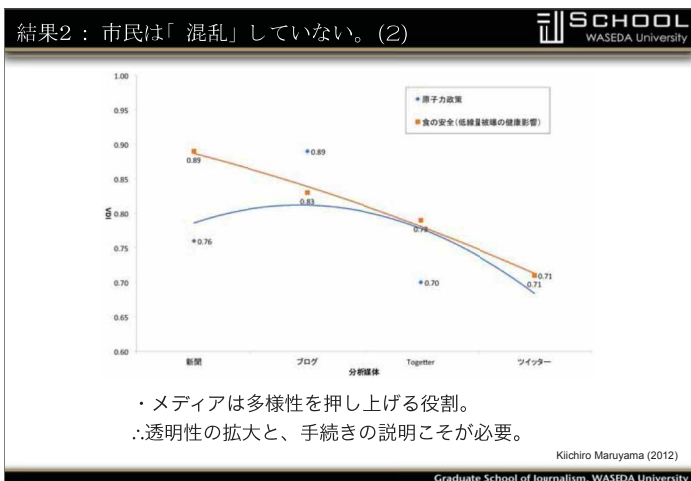
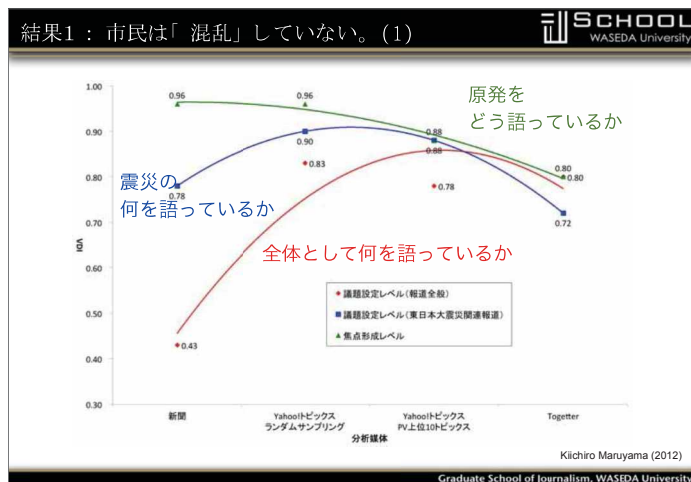
情報の「上流」から「下流」の多様性を比較した場合...

「啓蒙的科学観」:
= 上流から下流に向けて多様性が増大する
∴「大衆はパニックを起こし混乱するので上流が意思決定すべき」

「民主的科学観」:
= 上流～中流で多様性が最大化する
∴情報が必要充分にあることが大切。
「大衆は十分な議論弁別能力がある。
専門知は多様性を押し上げる機能と責務を持つ」

震災後の情報空間の意見多様性からは、
どちらの科学観が妥当だと観測されるだろう？

Graduate School of Journalism, WASEDA University



まとめ：日本社会の未成熟が露呈した「3つのA」

(1) 専門家は必ずしも適切にコミュニケーションしていない。
(2) 市民は混乱していない。
→適切な議論空間を築くための努力こそが必要。

●これから続く長い闘いで専門家は どうする？
・長期化・群発するだろうトランスサイエンス議題
→少数症例報告から始まる健康被害(含「飛ばし」研究・報道)

Agenda Building(議題構築) ≠ Agenda Setting(議題設定)
= 「一方的な押しつけでは無い、社会の構成員が参画しての
社会議題の協働的構築」

Advocacy(唱道) ≠ Enlightenment(啓蒙)
= 「『無知蒙昧な民を啓く』のでは無く、知識を提示し、
また自らの選択判断のプロセスも開示すること」

Alternativeness(選択性) ≠ Alternativeness(二者択一/代替)
= 「単純な反抗/否定ではない、建設的な選択可能性の提示」

Graduate School of Journalism, WASEDA University